№J2211

オセアニアにおけるアオウミガメの保全・保護と伝統的利用の両立に関する研究

京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科
東南アジア地域研究専攻博士課程
山口優輔

本研究の目的は、野生動物の保全・保護と伝統的利用が両立できることの科学的根拠を探り、その両方が持続可能となる方策を世界に提示することである。

アオウミガメ（Chelonia mydas）は重要な研究対象として位置付けられる。太平洋に広く生息するアオウミガメは、オセアニア島嶼部において貴重なタンパク質源として食利用されてきた生物であり、動物保護と先住民の文化的権利の間で軋轢が生じている。日本で唯一、生物地理学上オセアニアに区分される小笠原諸島においても、アオウミガメは伝統的に食利用されてきたが、一方で過去の大規模な乱獲の結果、個体数が激減し、その後の保全活動によって個体数を回復させてきた歴史を有している。

本研究では、主に日本の小笠原諸島母島におけるアオウミガメの伝統的利用と保全活動に着目し、ウミガメ漁における漁師の漁獲行動について、詳細な記録の収集をおこなった。また、保全活動の実態や食利用に対する意識について、聞き取り調査を実施した。併せて資料館などに残されている史資料の収集もおこない、我が国の食文化におけるウミガメ食の位置付けについても調査した。

結果として、母島においては現在でも伝統的な手法に基づいたウミガメ漁が続けられていることが明らかになった。また、ウミガメ漁において捕獲されたアオウミガメは、食用や販売用よりも保全事業に用いられる個体が多くを占めた。これは地元漁協が主体となって、保全活動を行っているためであった。同時に、島民からウミガメ食は伝統的な郷土料理として愛されていた。伝統的利用と保全活動の両立を確認することができた。

しかしながら、母島においてウミガメ漁に従事する漁師の数は減少の一途を辿っており、このままでは伝統的な漁法だけでなく、保全活動の縮小や、食文化の消失も危惧される。今後も、他の地域におけるウミガメ漁や保全・保護活動の実態も解明していくことで、アオウミガメをモデルとした伝統的利用と保全・保護の両立策を検討していく。